

# 教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 田村 節子  
学位: 博士 (心理学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
社会科学 心理学 教育心理学	社会科学 心理学 教育心理学 学校心理学

主要担当授業科目	<p>【学部】 心理学的支援論 (基礎)、スクールカウンセリング入門、学校心理学演習</p> <p>【修士課程】 家族・集団・地域社会の心理支援に関する理論と実践、心の健康教育に関する理論と実践、心理実践事前指導、心理実践実習、心理学研究法演習、臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ、学校心理学演習Ⅰ・Ⅱ 【博士課程】 学校臨床心理学研究、臨床心理学研究、学校臨床心理学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ</p>
----------	---

## 教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項

事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
① カウンセリング心理学	2011年4月～ 2016年3月	カウンセリングの基本技法について理論とロールプレイを通して講義を行った。
② 学校心理学	2013年4月～ 2016年3月	学校心理学の理論と実際について最近の子ども事情に触れながら講義を行った。
③ 臨床心理面接特論	2011年4月～ 2018年3月	臨床面接に必要とされる知識、技法(本格的なルールやプロセス、心理アセスメント、倫理、関与)について講義を行った。
④ 学校心理学特論	2013年4月～ 2016年3月	大学院生に対して学校心理学の理論について講義し討論や演習を取り入れ理論に基づく技法を習得できるように工夫した。
⑤ 心理学研究法	2013年4月～現 在	大学院生に対して質的研究について講義し実際の逐語録を基に定性的分析を行った。
⑥ 家族・集団・地域社会の心理支援に関する理論と実践、	2018年4月～現 在	公認心理師必修科目として示されている基準に沿ってアクティブラーニングを取り入れた講義を行った。
⑦ 心の健康教育に関する理論と実践、	2018年4月～現 在	公認心理師必修科目として示されている基準に沿ってアクティブラーニングを取り入れた講義を行った。
⑧ 心理実践実習	2018年4月～現 在	公認心理師必修科目として示されている基準に沿った実習等を行った。
2 作成した教科書・教材		
①石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門-学校心理学・実践編	2003年 3月	教師等が援助ニーズが高い子ども達への援助において援助チームを組み援助方針や援助案を立てるためのシートについて解説した。(共著)
②講座学校心理士—理論と実践 2—学校心理士による心理教育的援助サービス	2004年 4月	チーム援助の技法について具体的に解説した。(共著)
③臨床心理学全書第10巻	2004年 7月	心理教育的アプローチや実践事例について解説した。(共著)
④よくわかる学校心理学	2013年3月	「学校心理学の研究法Ⅱ」「学校の危機管理・緊急支援」「援助チーム」等について解説した。(共著)
⑤石隈・田村式援助シートによる実践チーム援助-特別支援教育編	2013年3月	発達障害など学校生活での苦戦をチームで援助する方法等について解説した。(共著)
⑥石隈・田村式援助シートによる子ども参加型チーム援助-インフォームドコンセントを超えて	2017年3月	子どものWANTSとNEEDSに着目し子どもや保護者と共に援助案を作成する方法等について解説した。(田村)

3 当該教員の教育上の実績に関する大学等の評価、学生による授業評価	2014年7月～ 現在	学生による授業評価アンケートで「カウンセリング心理学」「学校心理学」について「この授業を受けてよかったと思う」「教員の話し方が明瞭で聞き取りやすい」「この授業は知的興味や関心を抱かせるものだ」、「教員は授業の準備など熱心に取り組んでいる」等について高い評価を得た。
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 日本学校心理士主催研修会	2003年8月	資格ポイント研修会講師
2) 明治安田こころの健康財団主催	2004年8月	精神保健夏期研修講座講師
3) 広島県研修センター主催		
4) 全国養護教諭連絡協議会主催	2006年10月	不登校対応担当教員研修会 講師
5) 水戸教育事務所	2008年6月	学校教育相談実践講座講師
6) 茨城県弘道館アカデミー事業	2008年6月	不登校対策研究協議会講師
7) 鹿行教育事務所主催	2009年5月	マイライフいきいきセミナー講師
8) 明治学院大学 小諸大学事業	2009年6月	不登校対策研究協議会講師
9) 明治学院大学心理臨床センター 公開シンポジウム	2009年8月 2010年3月	地域子どもサポーター養成講座 講師 「不登校の子どもが親に求めるものとは」シンポジウム講師
10) 日本学校心理士主催研修会		資格ポイント研修会講師
11) 東京都教育委員会	2010年8月 2016年5月	「子供の特性の理解をめぐる学校問題をどう解決するか」と題して講演を行った。
12) 文部科学省「困難を有する子供・若者の相談業務に携わる公的機関職員研修	2016年10月	内閣府研修会講師として「不登校の子どもへの心理教育的アプローチとチーム援助」と題して保護者や教師、援助者等とチームを組んでの援助について講演を行った。
5. その他 (社会貢献)	2018年5月 2019年1月 2019年4月	2017年度 城戸奨励賞選考委員 5月1日 心理学検定局 運営委員(1月1日～) 公認心理師協会教育分野委員(4月7日～)
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許		
1. 中学校教諭専修免許 (社会)	1998年3月	茨城県教育委員会 平9中専第44号
2. 高等学校教諭専修免許 (地理歴史)	1998年3月	茨城県教育委員会 平9高専第183号
3. 学校心理士	1998年10月	学会連合資格「学校心理士」認定運営機構 第98249号
4. 臨床心理士	2000年3月	日本臨床心理士資格認定協会 第7573号
5. 幼稚園教諭一種免許状課程における、「教育心理学Ⅰ」(教職に関する科目)担当者(兼任・講師)として文部科学省より認定	2008年12月	茨城キリスト教大学文学部児童教育学科幼児保育専攻において、幼稚園教諭一種免許状課程認定を申請した際、「教育心理学Ⅰ」(教職に関する科目)担当者(兼任・講師)として文部科学省から教員審査を受け、認定された。
6. ガイダンスカウンセラー	2012年2月	スクールカウンセリング推進協議会「ガイダンスカウンセラー認定」第12020851号
7. 学校心理士スーパーバイザー	2012年10月	学会連合資格「学校心理士」認定運営機 第SV0059号
8. 公認心理師	2019年2月	指定登録機関一般財団法人日本心理研修センター第5578号
2. 特許等 なし		
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 東海村臨界事故緊急支援および地域援助	1999年10月	「臨界事故子どもの心のケア電話相談」立上げと危機介入を行った。

2) 日本学校心理学会『学校心理学研究』拡大編集委員	2000年～現在	拡大編集委員として「学校心理学研究」の査読を努めている。
3) 茨城県臨床心理士会スクールカウンセラー学校緊急支援グループ長	2007年11月～ 2008年	茨城県臨床心理士会スクールカウンセラー学校緊急支援グループ長として、茨城県教育委員会と連携し「茨城県スクールカウンセラー学校緊急支援ガイドライン」を発行した。
4) 日本教育心理学会『教育心理学研究』編集委員	2008年1月～ 2010年1月	編集委員として「教育心理学研究」の査読を努めた。
5) 茨城県教育委員会いじめ調査委員会及び自殺調査委員会委員	2014年11月～ 現在	茨城県教育庁高校教育課事業のいじめ調査委員会及び自殺調査委員会委員を現在まで努めている。
6) 一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会広報委員	2017年6月～ 2019年6月	一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会広報委員を努めている
7) 第三次東京都北区特別支援教育推進計画策定委員会副委員長	2016年3月～ 2017年12月	第三次東京都北区特別支援教育推進計画策定委員会副委員長を務めた。
8) 東京都青少年の性被害等の防止普及啓発に係るDVD教材の製作委託企画審査会審査委員	2017年8月29日	性被害等の防止普及啓発に係るDVD教材の製作委託企画審査会審査委員として審査会に出席し委託契約業者の選定に協力した。
5. その他		
1) 平成15年度 日本教育心理学会 優秀論文賞受賞	2004年10月	下記論文が学術的に高く評価され日本教育心理学会優秀論文賞を受賞した。 「教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開ー援助者としての保護者に焦点をあててー」（「教育心理学研究 51」 pp. 328-338.）
2) 平成28年度「東海村表彰」受賞	2016年5月	東海村の福祉の増進に貢献したことが認められ「東海村表彰」を受賞した。
3) 平成28年度日本学校心理学会「大会発表賞」受賞	2016年10月	日本学校心理学会名古屋大会にて「大会発表賞」を受賞した。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 著書 1. 『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門-学校心理学・実践編-』	共同執筆	2003年3月	図書文化	本書では、学校心理学の定義や心理教育的援助サービスについて論じた。具体的には学校心理学の理論を背景に、おもに教師が子どもの自助資源や環境(学校、家庭、地域)の援助資源を発見し、援助の見立てと手立てを行うために開発した援助シートについて論じた。さらに、シートを利用し開発的な援助から特別支援教育までを、教師・保護者・スクールカウンセラーなどが連携して行う具体的なチーム援助の方法について論じた。さらに、援助シートの書き方・使い方・生かし方について論じた。「共同執筆のため、本人担当部分抽出不可能」(共同執筆者：石隈利紀) (B5判、総157頁)
2. 『育てるカウンセリングによる教室課題対応全書 第8巻 学習に苦戦する子(第7章「学習支援ボランティア」担当)』	共著	2003年6月	図書文化	本書は、小学校・中学校で実践されている学習支援ボランティアについて副校長およびPTAのボランティアに聞き取り、学習支援ボランティアの定義や活動方法や留意点について解説した。さらに、学習で苦戦している子どもに対する学習支援ボランティアの具体的な援助について解説した。担当部分第7章「学習支援ボランティア」(共著者：國分康孝、石隈利紀、小野瀬雅人、藤澤伸介、岸田幸弘、他25名) (Pp. 182-185. を担当) (A5判、総204頁)
3. 『講座 学校心理士—理論と実践2—学校心理士による心理教育的援助サービス-(第11章「チーム援助の技法」担当)』	共著	2004年4月	北大路書房	本書では、学校心理士による心理教育的援助サービスの中核であるチーム援助の技法について論じた。具体的には、第11章「チーム援助の技法」について、援助チームを立ち上げるコーディネーターの役割や援助チームを進めていく相互コンサルテーションの方法、援助シートの解説、援助チームのタイミングや留意点、援助チームは教職員の援助力向上にも役立つことなどを解説した。(共著者：石隈利紀、河村茂雄、大河原美以、熊谷恵子、他13名) (p. 137-150 を担当) (A5判、総281頁)
4. 『上級編 教育カウンセラー標準テキスト(教育カウンセリングの方法とスキル「チーム援助」担当)』	共著	2004年5月	図書文化	本書では、学校心理学の定義や三段階の教育援助、4領域の心理教育的援助サービス、個別のチーム、学校レベルの援助サービスのコーディネーション、管理職のマネジメントについて解説した。さらに、具体的に援助チームの構成員である学級担任や教師、保護者、スクールカウンセラー等の役割について解説し、さらに援助チームのタイプについて論じた。(本章共著者：石隈利紀) (日本教育カウンセラー協会編、共著者：國分康孝、河村茂雄、岡田弘、中野良顕他14名) (Pp. 125-134 を担当) (B5判、総196頁)

5.『臨床心理学全書 第10巻 (第3章「心理教育的アプローチ」担当)』	共著	2004年7月	誠信書房	本書では、クライアントの問題解決を援助し、成長を促進する臨床援助活動の理論と技法のひとつである心理教育的アプローチについて解説した。さらにスクールカウンセリングの基盤である学校心理学を参照しながら心理教育的アプローチによる援助について議論し学校教育と非行臨床における心理教育的援助サービスについて実践事例を紹介し解説した。学校心理学の立場から論じた。担当執筆箇所「心理教育的アプローチ」(本章共著者：石隈利紀・生島浩)(大塚義孝・岡堂哲雄・東山紘久・下山晴彦監修 亀口憲治編、共著者：亀口憲治、平山栄治、石隈利紀、生島浩、森岡正芳、児島達美)(Pp. 124-198.を担当)(B5判、総272頁)
6.『学校心理学ハンドブック-学校の力の発見- (第3章「学校心理学に基づく実践『援助チームとは』、『援助チームの実際』、付録1「援助資源リスト」担当)』	共著	2004年3月	教育出版	本書は、学校心理学を扱う領域、実践、心理学的・行動科学的基盤、学校教育学的基盤について論じている。担当箇所「援助チームとは」では、援助チームの特長や意義、課題を解説し、「援助チームの実際」では、援助チームのタイプや、援助チームを効果的に機能させるポイントについて解説した。さらに援助資源のリストを作成した。(福沢周亮、石隈利紀、小野瀬雅人責任編集、日本学校心理学会編、共著者：松浦宏、小川俊樹、他86名)担当執筆箇所(Pp. 122-123.、Pp. 126-127、Pp. 234-239を担当)(A5判、総259頁)
7.『現代のエスプリ 特集 家族療法の現在 (心理教育的アプローチの現在「学校臨床における心理教育的アプローチ」担当)』	共著	2005年3月	至文堂	「家族療法の現在」について特集が組まれた本書の中で、心理教育的アプローチの現在のひとつとして、「学校臨床における心理教育的アプローチ」について論じた。具体的には、学校心理学の理論を議論し、心理教育的アプローチの実践としての学校心理学について解説した。さらに地域と連携したネットワーク型援助チームの実践事例について解説した。(本章共著者：石隈利紀)(亀口憲治編集、共著者：亀口憲治、長谷川啓三、吉川悟、遊佐安一郎、平木典子他13名)(Pp. 139-148を担当)(総220頁)
8.『チーム援助で子どもとの関わりが変わる-学校心理学にもとづく実践事例集(第3章「援助チームシート、援助資源チェックシートの使い方」、第7章「アスペルガー症候群の生徒とのかかわり」担当)』	共著	2005年6月	ほんの森出版	本書では、学校心理学の理論を解説し、学校心理学を基盤としたチーム援助の実践事例を編集した。第1章で「援助チームの作り方・進め方」と題して援助チームについて解説し、「援助チームシート・援助資源チェックシートの使い方」と題して、シート類の使い方について解説した。さらに、第3章で「アスペルガー症候群の生徒とのかかわり」と題して実践例を解説した。(共編者：石隈利紀、山口豊一)(共著者：吉本恭子、家近早苗、横山典子、他10名)担当執筆箇所(Pp. 14-18、Pp. 19-21、Pp. 109-115を担当)(B5判、総154頁)

9. 『新おねしょ革命ーおねしょがぜったい治る本』	共同執筆	2007年2月	教育出版	本章では、夜尿症治療の先進国である日本の最新治療を保護者向けにわかりやすく紹介した。特に夜尿症は親の対応や子どもの怠慢からくるものではなく、発達の個人差であることを解説し子どもへの対応方法や生活リズムの作り方などについて解説した。さらに、第6章「カウンセリンググループから」と題して、保護者と子どもへの心理面の援助について解説し、Q&Aで保護者の悩みに答えた。(共同執筆のため本人担当箇所抽出不可能)(共著者: 田村和喜・田村京子)(A5判、総154頁)
10. 『親と子が幸せになる「XとYの法則」』	単著	2007年7月	ほんの森出版	本書では、保護者および保護者にアドバイスを行なう教師等を対象に、幸せになる親子関係と、幸せが遠くなる親子関係について図を用いてわかりやすく解説した。本書では、子育ての目標が自立であることを示し、さらに、図をもちいて視覚的に親子関係を捉えることで、自分の子育てを振り返り、子育ての軌道修正が行ないやすくなるように工夫した。(A5判、総98頁)(NHK教育テレビで本書の内容の一部がとりあげられた。)
11. 『ヒューマンサービスに関わる人のための改訂教育心理学(第17講、不登校)』	共著	2009年4月	文化書房博文社	本書では、ヒューマンサービスに関わる人が不登校への理解を深め、どのように援助資源をいかして関わっていくかについて述べた。(編者 徳田克己、水野智美、高見令英)(共著者: 青柳まゆみ、石上智美、富樫美奈子、安心院朗子、望月珠美、向後礼子、田熊立、高橋稔、沢宮容子、小林明子、西館有沙)担当執筆箇所(Pp. 132-141)(B6判、総221頁)
12. 『ヒューマンサービスに関わる人のための子ども支援学(第9章子どもの心理的支援5、不登校)』	共著	2009年4月	文化書房博文社	本書では、ヒューマンサービスに関わる人が子どもの支援に携わる際に必要な不登校への心理的支援の理論と実際について述べた。(編者 西館有沙、徳田克己、高玉和子)(共著者: 原田知沙、吉岡尚美、金城やす子、山下亜紀子、大越和美、池田一郎、石上智美、富樫美奈子、向後礼子、水野智美、望月珠美、小林明子、西村実穂、野平眞弓、朴峠周子、安心院朗子、設楽紗英子、大神優子、高橋稔、田副真美)担当執筆箇所(Pp. 225-229)(B6判、総261頁)
13. 『学校心理学の最前線学校での効果的な援助をめざして(第14章保護者をパートナーとした援助チームの実際)』	共著	2009年4月	ナカニシヤ出版	本書では、保護者をパートナーとした援助チームの実際と題して、どのように保護者と連携して子どもへ支援していくのか、その理論と方法について述べた。(監修 石隈利紀、編者 水野治久)(共著者: 石隈利紀、水野治久、横島義昭、三野輪敦、武蔵由桂、河村茂雄、大友秀人、吉岡良治、飯田順子、樽木靖夫、小野寺正己、安達英明、田村修一、大河原美以、萱野亜希子、相楽直子、半田一郎、横山典子、家近早苗、上村恵津子、押切久遠、松浦正一)担当執筆箇所(Pp. 151-160)(B5判、総220頁)
14. 『保護者をパートナーとする援助チームの質的分析』	単著	2009年12月	風間書房	本書は筑波大学に提出した博士論文を刊行したものである。教師・保護者・コーディネーターらによる「コア援助チーム」「拡大援助チーム」「ネットワーク型援助チーム」の形成と展開を明らかにした。援助チームが組みにくいケースに焦点を当て、心理的な混乱が大きい保護者や学校に対する要求が強い保護者のパートナーモデルを生成した。明治学院大学出版助成を一部受けた。(A5判、総393頁)

15. 『カウンセリングのすべてがわかる—カウンセラーが答える本当の心理学—』	共著		株式会社技術評論社	本書はカウンセリングが身近になるように解説したものである。以下の項目を担当した。「遊戯療法ってどんなものですか？」(Pp. 100-101)、「女性に多く見られるこころの病と症状は？」(Pp. 124-125)、「障害のある子どもを持った親のカウンセリングってどんなものですか？」、(Pp. 145-146)、「民間施設におけるカウンセリングってどんなものですか？」(Pp. 158-159)、「学校カウンセラーって何をする人ですか？」、(Pp. 213-214)「ガイダンスカウンセラーって何をする人ですか？」(Pp. 217-216)を担当した。(監修 國分康孝・新井邦二郎、編著 石村郁夫・羽鳥健司・浅野憲一) (A5版、総247頁)
16. 『心理支援論—心理学教育の新スタンダードを構築をめざして—』	共著	2011年1月	風間書房	「第9章学校心理学と心理支援」(Pp. 121-135)を担当した。(A5版、総335頁)
17. 『子どもに『クソババア』と言われたら—思春期の子育て羅針盤—』	共著	2011年6月	教育出版	本書はNHK教育テレビ「となりの子育て」の司会者・子育て漫画家でもある高野優氏との共著である。反抗期の子どもとの対応の仕方を心理学的な見地と漫画から保護者に向けて書いた本である。
18. 『ガイダンスカウンセラー入門』	共著	2011年11月	図書文化	本書はガイダンスカウンセラーの入門書である。「ガイダンスカリキュラムにおけるコラボレーションの実際」を担当した。P82. Pp. 106-109.
19. 『養護教諭のコミュニケーション』	共著	2012年2月	少年写真新聞社	本書は養護教諭が必要なコミュニケーションについて基礎編と実践編からなる。実践編を担当した。
20. 『学校心理学ガイドブック 第3版』	共著	2012年2月	風間書房	本書は学校心理学の理論と実践について網羅したものである。学校心理士を取得する方へのテキストに推薦されている。コンサルテーションと学校カウンセリング・コンサルテーションの実践上の諸問題について執筆した。Pp. 140-143, Pp. 146-149.
21. 『実践チーム援助—特別支援教育編—』	共著	2013年2月	図書文化	本書は前著「援助チーム入門」の特別支援教育編である。特別支援におけるチーム援助について豊富な例を用いてわかりやすく解説をした。また援助チームシートや個別支援計画シートの使い方や記入の例を示し実践にすぐ役立つように工夫を行った。
22. 『よくわかる学校心理学』	編著	2013年3月	ミネルヴァ書房	「学校心理学の研究手法II」「コミュニティのネットワーク」「学校の危機管理・緊急支援」「援助チーム」「不登校・ひきこもり・いじめに関する援助」「別室登校・保健室登校などの校内での援助」「SC・SW・相談員として活かす」の節について学校心理学の視点から述べた。(編著) 水野治久・石隈利紀・田村節子・田村修一・飯田順子
23. 思春期の子育て羅針盤 (2) 家族ってけっこうビミョー	共著	2013年7月	教育出版	本書はNHK教育テレビ「となりの子育て」の司会者・子育て漫画家でもある高野優氏との共著での続編。家族関係・親子関係について心理学的な見地をわかりやすい文と漫画で保護者へ向けて書いた本である。
24. 石隈・田村式援助シートによる実践チーム援助-特別支援教育編	共著	2013年3月	図書文化	発達障害など学校生活での苦戦をチームで援助する方法等について解説した。

25. 学校心理学ハンドブック	分担執筆	2016年12月	教育出版	「チーム」に関連する項目を分担執筆した。(日本学校心理学会 編集)
26. 石隈・田村式援助シートによる子ども参加型チーム援助-インフォームドコンセントを超えて	共著	2017年3月	図書文化	子どものWANTSとNEEDSに着目し子どもや保護者と共に援助案を作成する方法等について解説した。
27. 『通級指導教室と特別支援教室の指導のアイデア 小学校編 (第4章「学校生活全体の充実をめざして③ 子どもの心理の理解と対応」担当)』	分担執筆	2017年11月	図書文化	本書では小学生の学校生活の充実をめざし、発達障害がある子どもの心の支え方、二次障害を抱えた子どものケア、ストレスのケア、関係が築きにくい子どものケアについて、子どもの心理理解と対応方法の解説をした。(編者：月森久江) (共著者：笹森洋樹、小林玄、小池敏英 他8名) (Pp. 176-183 を分担執筆) (B5版、総189頁)
28. 公認心理師の基礎と実践⑩ [第18巻] 教育・学校心理学	分担執筆	2019年3月	遠見書房	第一部第五章「子どもの多様な援助者によるチーム援助」(Pp. 66-78) を分担執筆。学校内の子どもの援助者について整理し、教師・保護者・SC・SSWによるチーム援助について解説した。 (共著者：石隈利紀、松本真理子、増田健太郎 他10名)
<b>2. 学術論文</b>  1. 『教師・保護者・スクールカウンセラーの援助チームに関する実践研究-公立中学校における学校心理学的援助の一試行』  (査読あり)	単著	1998年3月	筑波大学大学院教育研究科修士論文 (未公開)	本研究において、研究1では全中学生徒987人に対し悩みについてのアンケートを実施し生徒への予防的な関わりについて論じた。さらにその結果を予防に役立てる目的で、生徒および教師にフィードバックした。研究2では、学校心理学を理論的背景としたスクールカウンセラーの実践にもとづき、教師・保護者・スクールカウンセラーのコア援助チームの成立過程、援助チームの4タイプおよび4タイプの特徴について明らかにした。コア援助チームの概念は、学校教育におけるチーム援助のモデルとして意義があるとして本論文のまとめとした。 (A4判、総177頁)
2. 『教師・スクールカウンセラー・保護者からなる援助チームの実践的モデルに関する研究 (第3章「中学校における援助チームの実際-スクールカウンセラーの立場から-」担当)』  (査読無)	共著	2000年3月	科学研究補助金研究成果報告書 (基盤研究 (2)(c)) 研究成果報告書 課題番号 (09610102)	本報告書では、教師・スクールカウンセラー・保護者からなる援助チームの実践モデルとして、実践事例を解説した。具体的には、第2章「ネットワーク型援助チームの実践」、第2節「中学校における援助チームの実際-スクールカウンセラーの立場から-」と題して、不登校の中学生に対する援助について、実践事例を解説し、援助チームの展開のプロセスや、アセスメント、援助方針、援助案の立て方などについて学校心理学の視点で分析し検討した。代表 石隈利紀) (A4判、Pp. 73-84. を分担執筆)



<p>3. 『スクールカウンセラーによるコア援助チームの実践—学校心理学の枠組みから』</p> <p>(査読あり)</p>	<p>単著</p>	<p>2003年3月</p>	<p>教育心理学年報 (第42集)</p>	<p>本研究では、スクールカウンセラーが実践したコア援助チーム(教師・保護者・コーディネーターが核になり、他の援助資源を活用しながら定期的に援助する形態)の不登校中学2年生男子の事例を取り上げ、担任・保護者・スクールカウンセラーがそれぞれどのように子どもに関わったか心理教育的援助サービスの視点で考察した。子ども自身の自助資源、および子どもの環境としての援助資源の把握、多面的なアセスメント、援助の立案などのために援助チームシート・援助資源チェックシートも有用であることが示された。(B5判、Pp.168-181.)</p>
<p>4. 『教師・保護者・スクールカウンセラーによるコア援助チームの形成と展開—援助者としての保護者に焦点をあてて—』</p> <p>(査読あり)</p>	<p>共同執筆</p>	<p>2003年9月</p>	<p>教育心理学研究 (第51巻3号)</p> <p>(2003年度優秀論文賞受賞論文)</p>	<p>本研究では、不登校生徒15事例に対する援助チームの実践をもとに、①保護者を含む援助チームの実践モデルを提案し、保護者の状況に応じた援助チームの形態を分類した。保護者は、援助を受ける側と同時に援助を提供する側にも位置づけた。その結果、保護者は来談回数により4タイプに分かれ、それぞれの代表的な事例をあげて考察を加え、さらに保護者のタイプ別の援助チームの特徴や実践に当たっての問題点を分析検討した。(共同執筆者：石隈利紀)(共同研究の為本人担当部分抽出不可能)(平成15年度日本教育心理学会優秀論文賞受賞論文)(B5判、Pp.328-338.)</p>
<p>5. 『不登校などで特別の援助を求める児童生徒に対する学校・家族・地域の援助システム(第2章「発達障害のある中学生への援助—援助シートを活用した個別の援助案に焦点をあてて—」担当)』</p> <p>(査読無)</p>	<p>共著</p>	<p>2004年3月</p>	<p>科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究(C)(2))研究成果報告書課題番号(13610111)</p>	<p>本報告書の第5章において、中学校における不登校生徒への援助チームの実践事例を紹介し、学校心理学の視点で分析した。保護者をパートナーとしたコア援助チームから、校内の教師と連携する拡大援助チームになるまでの援助チームの成立と展開過程を明らかにした。さらに、コーディネーターの役割や、実践の留意点および実践上の課題について検討した。(代表 石隈利紀)(A4判、Pp.18-29.を分担執筆)</p>
<p>6. 『軽度発達障害の子どもに対するチーム援助のコーディネーション—学校心理学の枠組みから—』</p> <p>(査読無)</p>	<p>単著</p>	<p>2004年11月</p>	<p>LD研究、 (第13巻、第3号)</p>	<p>本研究では、発達障害がある不登校小学生男子の事例について、学校心理学の枠組みで援助した介入事例について検討し考察した。さらに、チーム援助のコーディネーションの過程や、コーディネーターの役割について学校心理学の視点で考察した。その結果本研究では、援助チームの活動は4つのSTEPで展開することや、コーディネーターはチームのためのアセスメントと個別のアセスメントを行なう必要があることが示唆された。さらに、援助が継続できるために、「縦の援助チーム」について長期の実践の必要があることを課題としてあげた。(B5判、Pp.239-247.)</p>
<p>7. 『保護者はクライアントから子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか—母親の手記の質的分析—』</p> <p>(査読あり)</p>	<p>共同執筆</p>	<p>2007年9月</p>	<p>教育心理学研究 (第55巻3号)</p>	<p>本研究は、不登校になった子どもの幼児から中学生までの母親の手記を、修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。発達障害があることがSCの面接でわかり気持ちの揺れを伴いながらも、母親がクライアントから子どもの援助のパートナーとなる心理的変容過程のモデルを生成した。さらに、カウンセリングニーズとコンサルテーションニーズの視点からも考察を加えた。(共同執筆者：石隈利紀)(共同研究の為本人担当部分抽出不可能)(B5判、Pp.438-450.)</p>

8. 『保護者が援助チームのパートナーとなるためには援助チームメンバーのどのような関わりが有効か』  (査読あり)	単著	2008年12月	学校心理学研究(第8巻)	本研究は、母親がクライアントから子どもの援助のパートナーとなった事例について、援助チームがどのように関わったを検討した。その結果、保護者と援助チームメンバーの間に、「親・援助者間ギャップ」が存在することが示唆された。(B5判、Pp.13-27.)
9. 『保護者をパートナーとする援助チームのタイプと援助過程の質的分析』  (査読あり)	単著	2009年2月	筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文(2009年12月公刊)	本研究では、教師・保護者・コーディネーターらによる「コア援助チーム」「拡大援助チーム」「ネットワーク型援助チーム」の形成と展開を明らかにした。さらに、援助チームが組みにくいケースに焦点を当て、心理的な混乱が大きい保護者や学校に対する要求が強い保護者のパートナーモデルを生成した。保護者が援助チームのパートナーとなるには、①援助要請②コーディネーターの介在③軌道修正のSTEPを経ることが明らかとなった。(A4判、総336頁)
10. 『学校心理士が行うコンサルテーションとは- Consultation Conducted by School Psychologists in Japan- 』  (査読無)	単著	2010年10月	日本学校心理士会年報	本稿では学校心理士がこれまで行っているコンサルテーションと、わが国の教育現場に合った形として提案されている相互コンサルテーションをとりあげ、学校心理士の視点からその特徴について論じた。さらに、学校心理士が行うコンサルテーションに必要な能力についても先行研究を踏まえて論じた。(Pp.19-27.)
11. 『心理的な混乱が大きい保護者が援助チームのパートナーとなる心理的変容過程モデル』の確認  (査読あり)	共著	2011年12月	教育相談研究(第48巻)	本研究は「心理的な混乱が大きい保護者のパートナーモデル(田村・石隈2007)」を確認し実践上の有用性を検討したものである。保護者への半構造化面接の分析結果から、心理的な混乱が大きい保護者をパートナーとする援助チームモデルは実践上の意義があることが示唆された。(Pp.25-34.)
12. 学校に対して要求が強い母親が子どもの援助のパートナーへとどのように変容するか-母親のインタビューの質的分析-  (査読あり)	共著	2013年	日本学校心理士会年報	本研究は学校に対して要求が強い母親が子どもの援助のパートナーへとどのように変容するかについて、母親のインタビューを質的に分析した。保護者のインタビューの分析結果から「学校に対し要求が強い保護者のパートナーモデル」を生成した。
13. 酪農教育ファーム活動の教育的効果に関する研究-小学生の思いやりと攻撃性に着目して-	筆頭	2014年3月	酪農教育ファーム調査研究	田村節子・阿部宏徳・関陽一・新井邦二郎 都内の小4年生52名について酪農体験の心理的効果を検討した。酪農体験に同行し体験前後に「思いやり尺度」、「攻撃性尺度」、「牛へのイメージ測定」で構成した質問紙を実施した。「おもいやり尺度」は1週間後には実習前と同程度に落ちたが3ヶ月後には再度向上し酪農体験の効果が認められた。

14. 女子中学生はなぜ関係性いじめをやめようと思ったのか—大学生・社会人へのインタビューを通して—	共著	2014年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 14, 90-99.	橋本早紀・田村節子 いじめ行為をやめるにはやめようと思った経験の有無よりも、①いじめ行為をしないという気持ちを強化する環境や、②自分の行為が良くない事だと強く実感する出来事が重要だと示唆された。さらに加害者と被害者の特徴を比較した結果、両者に共通した特徴が存在することが明らかとなり、誰でも被害者、加害者になりうる可能性が示唆された。
15. 子どもの問題状況を教師から伝えられたとき保護者はどう感じたのか—円滑な連携につながる「伝え方」の検討—	共著	2015年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 28-38.	齋藤真衣・田村節子 子どもの問題状況を教師から伝えられたときに保護者がどう感じたかを明らかにし、保護者・教師間の円滑な連携につなげるための「伝え方」について検討した。その結果、「子どもの気持ちを考えた伝え方」、「保護者の気持ちの受け止め」、「一緒に具体的な対策を考える」、の3つが挙げられた。教師が保護者と信頼関係を築き円滑な連携を始めるうえで重要なのは、教師の子どもと保護者に対する理解しようとする姿勢と、保護者を教師と同じ子どもの援助者として捉える視点であることが示唆された。
16. 現役中学生は学級の人間関係と自己の位置づけをどのように認知し変化させていくのか	共著	2015年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 146-155.	田村一明・田村節子 公立中学校1年生1学級について6月と11月の2回全員インタビューを行い、現役中学生が自己の所属する学級の人間関係をどのように捉え、その中で自分をどのように位置づけ変化させていくかを検討した。年度初めの人間関係は、物理的接点がかきつけになることが多く時間の経過と共に、自身が所属するグループ内の満足感がそのまま人間関係の満足感に結びつきやすくなることが示唆された。人間関係の変化は、学校行事よりもむしろ普段の生活の中での“慣れ”がかきつけになっていることが示された。
17. いじめにおける被害者が加害者への変わる理由—大学生への回顧法を用いたイメージをもとに—	共著	2015年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 180-190.	栗本顕・田村節子 , 被害者が加害者へと変わる理由について、①「自分を守るために仕方なくいじめを行う」、②「いじめられたからいじめ返す」、③「自分の欲求を満たすためにいじめを行う」といった気持ちが関係していることが明らかとなった。いじめの連鎖を止めるためには、①に対しては、気軽に相談ができる体制を整えるなど自分を守ることができる環境をつくる、②③に対しては相談の出来る機会を増やすことや怒りを鎮めるためのサポートを行うことが重要であり、加害者に対する教師の注意の仕方についても加害者の気持ちも汲み取るような注意の仕方をする必要があることが示唆された。
18. 新卒小学校教師は子どもや保護者への対応の悩みをどのように解決したのか	共著	2016年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 16	宮澤直美・田村節子 新卒2年目の小学校教師10名について1年目に子どもや保護者の対応についての悩みをどのように解決したのかインタビュー調査を行い質的分析を行った。その結果新卒教師は、先輩教師からのサポートを強く望んでいるが、納得出来ないアドバイスは受けないことが明らかとなった。新卒教師への援助は試行錯誤する新卒教師の主体性を見守り、悩みに耳を傾け信頼関係を築くことが重要であると示唆された。

19. 職場のハラスメントにまわりの人々はどのように関わっているのか	共著	2016年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 16	高橋恭太郎・田村節子 10名の社会人にインタビューを行い定性的分析を行い28個の概念を生成し15個のカテゴリーに統合後6個の上位カテゴリーにまとめた。その結果職場のハラスメントに対するまわりの対応には「出来事に関わらない」「加害者に対抗する」「加害者をうまく受け流す」があるという結果が得られた。また、「関わらない」「対抗する」場合には事態に変化はなくハラスメント被害は継続し、「受け流す」ときに「優しくなった加害者」につながる結果が得られた。
20. 思春期のネガティブな態度に母親はどのように対応し子どもは母親の対応をどのように感じているのか—母と娘の語りから—	共著	2016年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 16	大先真規子・田村節子 思春期のネガティブな態度に対し母親と子どもが相互にどのように感じるかについて検討した。12組の母娘のインタビューを質的に分析し母親の対応がポジティブであってもネガティブであっても子どものイライラや反抗的な態度が出現することが確認された。
21. 臨床研究・症例報告 夜尿症診療における心理面からのアプローチ (査読あり)	筆頭	2016年7月	小児科臨床 69(7), 1263-1271.	田村節子・池田裕一 わが国には80万人の夜尿症児がいるがおねしょを疾患ととらえる意識が乏しい。夜尿症児の学校生活の質の低下について紹介し夜尿症診療や心理面へのアプローチについて述べた。
22. 夜尿症患児と保護者のメンタルケア：看護師のコミュニケーションが患児を救う（特集夜尿症の子どものトータルケア） -（子どもと保護者の心のケア）	筆頭	2017年1月	小児看護 40(1), 50-54.	田村節子 夜尿症児の子どもや保護者のストレスが非常に高いことはわが国ではあまり知られていない。そこで夜尿症児の子どもと保護者の心理面に焦点を当てて、おもに看護師が行う心理教育的アプローチについて解説した。
23. 通信制高等学校サポート校における登校安定までの心理的変容過程	共著	2016年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 17	山田耕一 田村節子 中学生時代に不登校を経験した生徒が、通信制高等学校サポート校において登校を安定させるまでの心理的変容過程のモデルを生成した。目的登校安定までの要素として子どもの成長を支える3つの要素、安心できる居場所(学校や家庭など)、登校意欲を維持するもの(友人、生徒同士の助け合う仕組み、学費負担)、適度な距離感のある先生のサポートを明らかにした。
24. 不登校経験者が不登校経験を意味づけていく過程に関する研究—就学・就職をした中学時不登校経験者へのインタビューを通して—	共著	2017年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 17	関 鋼二 田村節子 不登校経験者の意味づけを明らかにした研究である。理論的飽和には至らなかったが、不登校経験者が不登校経験を逃避し、高校生活を通して自信を育み徐々に不登校経験の振り返りを行うようになることや、不登校経験も自身の経験の一部だと受け止めることが青年期の発達課題であるアイデンティティの確立に寄与する可能性を示唆した。
25. 夜尿症に対する学校心理士・教員の意識調査	共著	2017年7月	第28回日本夜尿症学会学術集会(2017/07/15)	池田裕一 田村節子 学校心理士と教員に対して、夜尿症に対する意識調査を行った。

26. 昼間尿失禁児童の心理・社会的QOL	共著	2018年9月	日本小児科学会雑誌 122(9), 1429-1440.	池田裕一 田村節子 昼間尿失禁 (DI) 児童の学校生活や友人関係などの心理社会的な影響を明らかにした研究である。幼少期から続くDIが小学校入学時点において、心理社会的QOLに影響を及ぼしている可能性があり、DIに対する早期対応とDI児童の心理面に留意した診療が必要であることを示唆した。
27. 膠原病患者を対象としたサポート・グループの実践	共著	2018年12月	心理臨床学研究, 第36巻, 第5号 (pp. 545-555)	大河内範子・田村節子・高松里 膠原病患者を対象としたサポート・グループの援助効果と運営者の役割について検討をした。
28. 全身性エリテマトーデス患者の心理的変容過程——複線経路・等至性モデルによる分析の結果から——	共著	2019年	総合病院精神医学	大河内範子・田村節子
<b>3. 総説その他</b> (紀要等) 1. 『自閉症的傾向の幼児A君との関わりを振り返って』	共著	1992年3月	日立市教育研究所教育報告書 第101巻	本教育報告書において、自閉症傾向の幼児へのプレイセラピーの過程について記述し考察した。(共著者：大山春代他) (B5判、Pp. 39-44. を分担執筆)
2. 『教育相談の機能と利用状況』	共著	1993年3月	日立市教育研究所教育報告書 第106巻	本教育報告書において、統計の数字に現われた学校訪問相談の特徴や役割について執筆した。(共著者：藤平雅子・田山紀子・石橋あやめ・岸本恭子他) (B5判、Pp. 37-46. を分担執筆)
3. 『統計から見た学校訪問相談』	共著	1994年3月	日立市教育研究所教育報告書 第110巻	本教育報告書において、統計の数字から見た教育相談の機能と利用状況について執筆した。(共著者：田山紀子・丸谷慶子他) (B5判、Pp. 29-40. を分担執筆)
4. 『チームで援助するための具体的方法 (特集 悩む担任をどう支えるか)』	共著	1998年10月	月刊学校教育相談、第12巻、第12号 ほんの森出版	本稿では、学校心理学に基づき、実践事例をもとに、悩む担任を支えるためにチームで援助するための具体的な方法について執筆した。 (A5判、Pp. 14-22. を分担執筆)
5. 『援助シートを利用しながら行う教師との連携—スクールカウンセラーの立場から—』	共著	1999年2月	高校教育展望、第25巻小学館	本稿では、学校心理学に基づき、援助シートを利用しながら教師と連携した実践事例をもとに、スクールカウンセラーの立場から学校心理学に基づいて考察した。 (A5判、Pp. 106-110. を分担執筆)
6. 『校教育相談の効果的進め方—連携・協働への模索—』	共著	2000年2月	高校教育展望、第26巻小学館	本稿では、学校心理学に基づき、学校教育相談を効果的に進めるために必要な援助資源との連携や協働について、教師や保護者とスクールカウンセラーとの連携の実践事例をもとに考察した。 (A5判、Pp. 12-17. を分担執筆)
7. 『教育相談を支える私の小道具—絵しりとり遊び、友だち関係図— (特集 1教育相談を支える私の小道具)』	共著	2000年3月	月刊学校教育相談、第14巻、第4号 ほんの森出版	本稿では、児童生徒との関係作りを促進するために教師等が利用できるツールについて、絵しりとり遊びは緊張感をほぐし、友だち関係図は自分や状況を客観視できることを示した。(A5判、Pp. 98-119. を分担執筆)

8. 『保護者を加えたチームで援助する(特集 チーム援助の試み)』	共著	2001年3月	月刊学校教育相談、第15巻、第4号 ほんの森出版	本稿では、学校心理学に基づいて保護者を子どもの援助のパートナーとして加えたチームについて、チームになる過程を含めて題して執筆した。 (A5判、Pp. 59-65. を分担執筆)
9. 『不登校で引きこもっている(緊急事態こんなときの親の役割と対応)』	共著	2001年12月	児童心理、第55巻、第17号 金子書房	本稿では、不登校で引きこもっている子どもに対して、親がどのように関わったらよいかについて、例をあげて解説した。 (A5判、Pp. 132-134. を分担執筆)
10. 『現代カウンセリング事典「援助チーム」』	共著	2001年12月	金子書房	本事典では、「援助チーム」の語句について、学校心理学に基づく援助チームの活動について解説した。(A5判、P. 40. を分担執筆)
11. 『援助チームについて考えるー保護者・教師・スクールカウンセラー等との連携(育てる・育つ・生きる…新世紀の人間関係を求めて)』	共著	2002年1月	月刊生徒指導、第32巻、第2号、学事出版	本稿では、保護者や教師、スクールカウンセラーとの連携と題して、大野精一氏、八並光俊氏らとシンポジウムを行なった担当部分について執筆した。 (A5判、Pp. 90-95. を分担執筆)
12. 『教師・保護者・スクールカウンセラーによるチーム援助』	共著	2003年1月	Mindix ふらぎ、第9巻、第2号 安田生命事業団	本稿では、学校心理学に基づく教師・保護者・スクールカウンセラーによるチーム援助について、具体的に執筆した。 (B5判、Pp. 14-19. を分担執筆)
13. 『子どもが落ちこんでいる・悩んでいる場合ー体育ができない・いじめられているなど(特集 叱るしつけ・ほめるしつけて)(親の上手な叱り方・ほめ方)』	共著	2003年12月	児童心理、第57巻、第18号 金子書房、Pp. 92-95.	本稿では、子どもが落ちこんでいたり、悩んでいたりした場合に親はどのように関わったらいいかについて、具体的にわかりやすく解説した。 (A5判、Pp. 14-22. を分担執筆)
14. 『レクチャールームコーディネーションの中の個人情報の扱い』	共著	2004年3月	発達の遅れと教育、第559号 日本文化科学社	本稿では、チーム援助のコーディネーションを行なう際に発生する個人情報の取り扱いについて具体的に解説した。 (B5判、Pp. 34-37. を分担執筆)
15. 『子ども一人ずつに支援隊を！生徒を支えるシステム作り(特集生徒と教師のための知っておきたい心理学)』	共著	2004年11月	英語教育、第53巻、9号 大修館書店	本稿では、教師が生徒のために相談活動する際に、どのように学校の中でチームワークを築いていけばいいかについて解説した。 (B5判、Pp. 16-19. を分担執筆)
16. 『チーム援助のあり方ー教師・スクールカウンセラー・保護者の連携(特集学校におけるチームワークー教職員、保護者、地域の力を生かす)』	共著	2004年7月	日本教育、第325号 社団法人日本教育会	本稿では、援助ニーズが大きい子どもに対して、保護者を含めた援助チームをどのように立ち上げ、教師がスクールカウンセラーや地域と連携していくかについて、学校心理学をもとに解説した。 (B5判、Pp. 12-15. を分担執筆)

17. 『スクールカウンセラーとして—ともに子どもを援助する関係をつくるために(親と教師の信頼関係づくり—子どもの学習意欲・人間関係をはぐくむために)』	共著	2005年10月	児童心理、第59巻、第15号 金子書房	本稿では、学校心理学に基づくスクールカウンセラーの活動として、基盤となる親と教師の信頼関係づくりについて執筆した。 (A5判、Pp. 67-72. を分担執筆)
18. 『「特別支援教育のアセスメントシートを不登校・保健室登校の生徒にも使いたいと思っています。どのような記入項目がいいのでしょうか？」(養護教諭のための教育実践に役立つQ&A集)』	共著	2006年7月	健康教室、第57巻、第9号 東山書房	本稿では、特別支援教育のアセスメントシートを不登校・保健室登校の生徒に応用する方法について、石隈・田村式援助チームシートを紹介し解説した。 (B5判、Pp. 30-33. を分担執筆)
19. 『子どもの心の葛藤を聴く—うそをつく・人の批判や攻撃ばかりする・話そうとしない・乱暴になる(特集 子どもの話を聴ける先生)』	共著	2006年10月	児童心理、第60巻、第14号 金子書房、	本稿では、子どもの話を教師が聞きにくくなる、嘘をついたり、人の批判や攻撃ばかりしたり、話そうとしなかったり、乱暴になったりする子どもについての対応を事例をあげて執筆した。 (A5判、Pp. 14-22. を分担執筆)
20. 『チームで支援するために—概論 援助チームによるコーディネーション(特集 特別支援教育を推進するための「コーディネーターハンドブック」)』	共著	2006年10月	特別支援教育研究、第590号 日本文化科学社	本稿では、チームで援助する際に基盤となる学校心理学の理論について解説し、援助チームへのコーディネーションの方法について解説した。 (B5判、Pp. 6-9. を分担執筆)
21. 『コーディネーターによるチーム援助の事例(特集 特別支援教育を推進するための「コーディネーターハンドブック」)』	共著	2006年10月	特別支援教育研究、第590号 日本文化科学社	本稿では、特別支援教育を必要とする子どもに対し、学校心理学に基づくチーム援助に関わった事例について紹介し解説した。 (B5判、Pp. 10-11. を分担執筆)
22. 『私の提言 保護者にぜひ伝えたい親と子が幸せになる「XとYの法則」』	単著	2007年3月	月刊学校教育相談、第21巻、第4号 ほんの森出版	本稿では、親子関係や子育てについて学校の先生が保護者に助言する際のコツについて、図を用いて説明する方法を紹介した。 (A5判、Pp. 62-65. を分担執筆)
23. 『読者のリクエストに応えて！おねしょの治療と学校の先生の対応のポイント』	共著	2007年11月	月刊学校教育相談、第21巻、第13号 ほんの森出版	本稿では、「夜尿症児に対して理解ができない」という小学校教師の質問に対して、夜尿症についての理解や教師が行える夜尿症児への対応について執筆した。(共著者：田村和喜) (A5判、Pp. 56-59. を分担執筆)
24. 『茨城県スクールカウンセラー学校緊急支援ガイドライン』	共同執筆	2007年11月	茨城県臨床心理士会発行	本稿では、学校緊急支援ワーキンググループ長として、茨城県および市町村教育委員会、スクールカウンセラーが連携した緊急支援の体制づくりと緊急支援時の配付資料を作成した。「共同執筆のため抽出不可能」 (A4判、総58頁)

25. 『連携の考え方・進め方のコツ 特集 スクールカウンセラー 小・中学校での役割と実践』	共著	2008年4月	児童心理	本稿では小学校におけるスクールカウンセラーの役割や連携のコツについて執筆した。 (B5判、総62頁 Pp. 76-84を分担執筆)
26. 『三つのステップで親を援助チームのパートナーに』	共著	2009年11月	月刊学校教育相談、第23巻、第13号	親を援助チームのパートナーとするための3つのステップについて解説した。親を援助を受ける側だけではなく、援助を提供する側にも位置づけることを強調した。(B5判、Pp. 10-13. を分担執筆)
27. 『提言 子どもや学校の援助資源を活用したコンサルテーションとは』	共著	2010年10月	LD&ADHD、明治図書	「特集 通常の学級に役立つ支援の仕組みーさまざまなリソースを利用したコンサルテーション」の中で援助資源を活用したコンサルテーションについて提言を行った。(Pp. 6-7. を分担執筆)
28. 『親をパートナーとするチーム援助』	共著	2011年2月	児童心理	校内で親を援助チームのパートナーとするにはどうしたらよいかについて執筆した。(B5判、総151頁 Pp. 41-47を分担執筆)
29. 『チーム支援の必要性とうまく進めるコツ』	共著	2012年3月	指導と評価 Vol. 58-3 No. 687	1年間連載された「学校で特別支援教育に取り組む」の一番最後のまとめの回を担当した。
30. 私立学校のいじめ	共著	2012年8月	アエラ No. 33	私立学校のいじめについて、親が進学先を決めた場合や、通学時間の長さ、睡眠不足等が子どものストレスになる可能性についての記事が掲載された。P19
31. 保護者の覆面座談会 『教師との信頼関係を築くために必要な支援を本音で語る』	共著	2012年10月	月刊実践障害児研究、学研教育出版 Vol. 472	発達障害のある子どもをもつ保護者4名との覆面座談会を行った。テーマは学校との連携である。Pp2-7.
32. チームで援助する一保護者をパートナーとして	単独	2012年11月	指導と評価 Vol. 58-11 No. 695	保護者をパートナーとするチーム援助の作り方、生かした等について解説した。
33. 男の子のきょうだいの育て方	共著	2013年10月	学研 頭のいい子の育て方Vol. 21	学研 P. 38-43. 男の子の育て方について、読者の疑問に答えた。
34. 子どものネット依存症を防ぐために	単独	2013年11月	ヘルシスト 株式会社 ヤクルト	ネットに依存する子どもの心理について解説した。
35. いざ、思春期・反抗期 親はどう向き合う？	共著	2013年3月	ducareデュケレvol. 15 日本経済新聞社	P. 53-63. 反抗期への対応について述べた。
36. 豊かな学校生活のために	分担執筆	2013年3月	東京書籍「機関誌エディフロント」	現場から出された実際の事例について、子どもの問題状況別の対応策を述べた。



37. 「児童・生徒理解」のためにできること	単独	2014年2月	時事通信社「教員養成セミナー」4月号, 8-9.	「児童・生徒理解」のために教員等の援助者ができることについて述べた。
38. 酪農教育ファーム活動の教育的効果に関する研究を行い報告書を作成-小学生の思いやりと攻撃性に着目して-	筆頭	2014年3月	酪農教育ファーム	酪農教育ファーム調査研究の一環として、小学生4年生3学級とともに1日牧場にて牛と触れ合う活動を行い事前事後の調査結果をまとめた。 田村節子・阿部宏徳・関陽一・新井邦二郎
39. 児童・生徒への心のケア	単独	2014年5月	教育展望 60(4), 26-30.	児童・生徒への心のケアについて述べた。
40. 『悩みを話せる子-援助を求める力をどう育てるか』	単独	2014年7月	児童心理、第68巻、第10号 金子書房 Pp. 47-51	本稿では、悩みを抱えている子どもに対して、学校現場や家庭で何ができるのかについて、具体的にわかりやすく解説した。
41. 反抗期の子どもとの向き合い方	単独	2014年12月	ALPS Familyコーナー 2015年1月号、第120号	思春期の子どもの反抗期とその対応について述べた。
42. いざこざを成長の糧とするためには：良いいざこざ？ 悪いいざこざ？	単独	2015年1月	児童心理 69(1), 11-17.	いざこざを成長の糧とするための方法について述べた。
43. 今どき女の子のお悩み事情	単独	2015年4月	PHPのびのび子育て6月特別増刊号P68-74	現代の女の子の育て方について、発達や今どきの子ども達の問題状況をまじえて解説した。
44. チーム援助で特別支援教育のさらなる充実を 学校心理学を背景に	単独	2015年4月	指導と評価 Vol.61-4 No.724 ,35-37.	特別支援教育を充実させるためのチーム援助の方法について述べた。
45. バイバイ、おねしょ	取材記事	2015年8月	朝日新聞社	夜尿症児や保護者の心理的影響について取材を受けて述べた内容が掲載された。
46. いま、こどもたちは	単独	2015年11月	指導と評価 Vol.61-11 No.731	今の子ども達の問題状況について、緘黙・夜尿症・LGBT, ゲームへの依存, ネットいじめ, リベンジポルノを取り上げて概観した。
47. 合理的配慮が求められる時代の特別支援教育(4) チームで行う特別支援教育-保護者・子どもとのパートナーシップ-	単独	2017年7月	指導と評価 Vol.61-11 No.731	当事者である保護者と子どもとのパートナーシップについてチーム援助の視点で解説した。

48. 担任の手腕が生み出すイキイキした学級—子どもを活性化のポイント	単独	2018年1月	児童心理、第72巻、第1号 金子書房 Pp. 37-42	子どもがクラスの中で安心して自分らしくいることができ、自分の能力を十分に発揮することができるように、担任の手腕という視点から活性化のポイントを解説した。
49. 思春期に向き合いたい子どもとの関係づくり	単独	2018年4月	ジュニアサッカーを応援しよう！ Vol. 48, Pp. 61-65	進路について悩む時期である思春期の子どもの反抗への対処法や親子関係について解説した。
<b>(学会発表)</b>				
1. 自発的な体験を重視する援助指導の有効性について—適応指導教室「うめの香ひろば」の実践を通して—	共同	1997年	日本カウンセリング学会第30回大会	日本カウンセリング学会第30回大会論文集 (黒澤祐一、田村節子)
2. 教師・保護者・スクールカウンセラーの援助チームに関する学校心理学的研究	共同	1997年	日本カウンセリング学会第30回大会	日本カウンセリング学会第30回大会論文集 (黒澤祐一、田村節子)
3. 中学生・高校生のもつ悩みに関する学校心理学的研究(1)	共同	1998年	日本教育心理学会第40回総会	日本教育心理学会第40回総会論文集, 360 (田村節子、石隈利紀)
4. スクールカウンセラー活用に関する学校心理学的研究(2) —中学校における校内援助チームに焦点を当てて—	共同	1999年	日本教育心理学会第41回総会	日本教育心理学会第41回総会論文集, 564 (今田里佳、田村節子、関根たまえ、大関健道、須々木真紀子、小野瀬雅人、石隈利紀)
5. 学校心理士として授業コンサルテーションをどう進めるか	共同	2000年	日本教育心理学会第42回総会	日本教育心理学会 第42回総会、発表論文集, 194 (半田一郎、青野勇、足立由美子、田村節子、難波博子、小野瀬雅人、石隈利紀)
6. 学校で求められる心の専門家 —学校心理士の独自性と専門性—	単独	2003年	教育心理学会第45回総会自主シンポジウム	シンポジスト
7. 援助チームシートを活用した不登校の子どもの変容過程 —発達障害を有する子どもの援助ニーズに、誰が・どのように応えたか—	単独	2003年	教育心理学会第45回総会準備委員会企画シンポジウム	シンポジスト
8. 援助チームの過程で生じた「保護者と援助者間の認識のギャップ」—発達障害を有し不登校となったA子の事例の検討から—	単独	2007年	日本学校心理学会第9回大会(埼玉会館)	筆頭ポスター発表

9. 日本における学校心理学—教師・保護者・スクールカウンセラーによるチーム援助—	単独	2008年	日本学校心理士会（千葉大学）	筆頭ポスター発表
10. 大会企画シンポジウム：発達障害に関する「ほんものチーム」—教師・保護者・相談員等の連携—	共同 連名	2011年6月	学校における心理と教育の国際シンポジウム（中国 広州市 華南師範大学）	華南師範大学学校心理健康教育研究大会 招待講演 「日本における学校心理学」 塩見邦雄・石隈利紀・田村節子・山口豊一・家近早苗, Kathleen Minke (NASP会長) シンポジスト
11. スクールカウンセラーに対する中学生の援助不安に関する質的研究—相談したくてもできない生徒への援助に焦点をあてて—	共同	2011年9月	日本LD学会第20回大会（跡見大学）	司会：山口豊一 シンポジスト：家近早苗・田村節子・山岡修 指定討論者：牟田悦子
12. ガイダンスカウンセラーの未来地図	連名	2011年10月	日本学校心理学会第13回大会（信州大学）	連名ポスター発表 櫻井由史・田村節子
13. 大学生における発達障害・学習リテラシーと精神的健康に関する調査	共同	2012年8月26日	スクールカウンセリング協議会（跡見学園女子大学）	シンポジウム「ガイダンスカウンセリングの目指すもの」 司会 國分康孝 企画主旨 國分久子 シンポジスト 片野智治 会沢信彦 大池公紀 田村節子
14. 大学におけるスクールカウンセリングの実践（2）—コーディネーターの役割に焦点を当てて—	筆頭	2012年9月15日	日本心理臨床学会第31回秋季大会（愛知学院大学）発表抄録 P 628	ポスター発表 田村節子・飯田順子・山口正寛・根津克己
15. 大学におけるスクールカウンセリングの実践（1）—担任の役割に焦点を当てて—	筆頭	2012年10月	日本学校心理学会第14回大会（高知大学）	ポスター発表 飯田順子・田村節子・山口正寛
16. 大学生における発達障害・学習リテラシーと精神的健康に関する調査（1）	連名	2012年10月	日本学校心理学会第14回大会（高知大学）	ポスター発表 田村節子・飯田順子・山口正寛・根津克己
17. 大学におけるコーディネーション委員会の援助活動モデルの生成—退学・休学予防の学内プロジェクトの実践を通して—	筆頭	2013年9月	日本学校心理学会第15回大会（三重大会）	ポスター発表 田村節子・飯田順子・山口正寛

18. Japanese teachers' behaviours for Building partnership with students' parents	筆頭	2013年7月	ISPA (Porto)	Junko Iida・Setsuko Tamura・Toyokazu Yamaguchi
19. 大学における担任の援助活動モデルの生成—担任による援助サービスの実践を通して—	連名	2013年8月	日本教育心理学会第55回総会（法政大学）	連名ポスター発表 飯田順子・田村節子・山口正寛
20. 大学生における発達障害・学習リテラシーと精神的健康に関する調査（2）	連名	2013年8月	日本心理臨床学会	飯田順子・田村節子・山口正寛・根津克己
21. 大学におけるコーディネーション委員会の援助活動モデルの生成～退学・休学予防の学内プロジェクトの実践を通して～	連名	2013年	日本学校心理学会	田村節子・飯田順子・山口正寛
22. Condition of success for forming a student-participated support team:Qualitative analysis of retrospective interviews with persons with developmental disabilities.	筆頭	2013年	ISPA(Vytautas Magnus University)	Setsuko TAMURA, Sanae IECHIKA, Toshinori ISHIKUMA
23. How do the school support coordination committees become "real team" : Roles of special needs education coordinator for effective support to children.	筆頭	2014年7月17日	ISPA(Vytautas Magnus University)	Sanae IECHIKA ,Setsuko TAMURA, Toshinori ISHIKUMA
24. 発達障害の困り感のある大学生支援マニュアルの作成とその有用性	連名	2014年7月17日	日本カウンセリング学会第47回大会（名古屋大学）	菊池春樹・田村節子・渡部雪子 発達障害の困り感のある大学生支援マニュアルを作成し有用性について検討した。
25. 学生の困り感に対する援助モデルの作成および援助活動報告	連名	2014年8月31日	日本学校心理学会第16回大会（玉川大学）	田村節子・渡部雪子・菊池春樹・根津克己・西村昭徳・新井邦二郎
26. 子ども参加型援助チームに子どもが望むこと～成人になってから発達障害が分かった人の語りから～	筆頭	2014年9月7日	日本LD学会（大阪国際会議場）	田村節子・家近早苗・石隈利紀

27. 表情写真を活用したカードゲーム「面探偵困難」の試作 ー 状況場面に応じた感情の読み取りに焦点をあてて ー	筆頭	2014年11月23日	日本学校心理学会第17回大会（大阪教育大学）	田村節子・阿部宏徳・栗本顕
28. 学生の困り感に対する援助モデルの作成および援助活動報告Ⅱ ー 新入生に対するサポート体制とその評価 ー	筆頭	2015年7月19日	日本学校心理学会第17回大会（大阪教育大学）	西村昭徳・田村節子・新井邦二郎・菊池春樹・渡部雪子・根津克己
29. 多様な子どもを援助する仕組みーチーム援助を考えるー	シンポジスト	2015年7月19日	17回大会（大阪教育大学）	シンポジスト
30. 学生の困り感とGPA値に基づく援助モデル作成の試み	筆頭	2015年7月	日本カウンセリング学会第48回大会（IPU・環太平洋大学）	渡部雪子・西村昭徳・田村節子・新井邦二郎・菊池春樹・根津克己
31. マイノリティの子ども達への心理教育的アプローチを考える	企画者・シンポジスト	2015年8月29日	日本学校心理士会第18回大会（東京成徳大学）	大会シンポジウム ＜企画者＞新井邦二郎・田村節子 ＜話題提供者＞梅宮れいか・砂長美ん・吉本恭子・田村節子
32. 子どもの学校生活QOLの検討ー児童の自己評価と保護者の代理評価との比較からー	単独	2016年12月3日	日本学校心理学会第19回大会（筑波大学）	ポスター発表 田村節子
33. 中学生が親の学業期待に応えようとする理由の検討	連名	2017年9月16日	日本学校心理学会第19回大会（筑波大学）	ポスター発表 飯島航太・田村節子
34. 中学生の孤独感の構造に関する質的研究ー回顧法を用いてー	連名	2017年9月17日	日本学校心理学会第19回大会（筑波大学）	ポスター発表 吉田雄介・田村節子
35. 教育現場における夜尿の子どもの現状と課題ー教育・医療・家庭との連携を目指してー	連名	2018年7月14日	第29回日本夜尿症学会学術集会 （ホテルメルパルク横浜）	会長要望講演 田村節子
36. A Prevention Model Aiming to Improve Quality of School Life for Nocturnal Enuresis in Children with Characteristics of Developmental Disorders - Based on a Follow-up Study of Nocturnal Enuresis Detected during School Health Checkups-	筆頭	2018年7月26日	ISPA 2018 Tokyo（国際学校心理学会第40回東京大会） （東京成徳大学）	ポスター発表 Setsuko TAMURA・Yuichi Ikeda・Toshinori Ishikuma
37. 膠原病サポートグループ参加によるメンバーの心理的変容過程	連名	2018年8月31日	日本心理臨床学会 第37回大会 （大阪大学）	ポスター発表 大河内範子・田村節子・高松里

(新聞記事)				
1. 負の感情に焦点をあてて	単独	2008年12月	東京新聞茨城版	負の感情に焦点をあててというテーマで、増え続ける小中学校の校内暴力件数について、その要因と対応についてインタビューに答えた。
2. 自立を促す「よいあきらめ」	単独	2009年8月	日経新聞夕刊	全国養護教諭連絡協議会の研修会にて、幸せになる親子関係について記者が講義を取材した内容とインタビューが掲載された。 (2009年8月13日木曜日8面)
3. 子育てのコツ伝授	単独	2011年1月	茨城新聞	茨城県岩間市中学生高校生父母の会主催の講演会「子どもにクソババアと言われたら一思春期の子どもと向き合うコツ」の講演内容が取材され地方紙に掲載された。
4. 絆づくりは声かけから 専門家招き研修	単独	2011年9月	茨城新聞	茨城県常陸太田市女性ネットワーク主催の研修会「親と子の絆づくりーXとYの法則からー」の講演内容が取材され地方紙に掲載された。
5. 養護教諭コミュニケーションのポイントは他の職員との連携が大事	単独	2012年5月10日	教育新聞 6面	養護教諭がコミュニケーションを校内で取る際のポイントについて解説した。
6. 思春期の子育てー夏休みの子どもへの関わり方	単独	2012年7月19日	聖教新聞	夏休みの過ごし方について、保護者向けにわかりやすく解説した。(2012年7月19日木曜日6面)
7. デジタルアーツ株式会社 記者発表会 「スマホアプリ利用とネット上のコミュニケーション実態調査発表会」	単独	2012年12月10日	ヤフー等ネット記事 110社に掲載	デジタルアーツ株式会社(子ども向け携帯フィルタリング会社) デジタルアーツ株式会社 記者発表会 「スマホアプリ利用とネット上のコミュニケーション実態調査発表会」 ～ 小中高生の2人に1人はネット上に友人がおり、女子高生の半数以上がネット上で知り合った人と直接会ってみたいと回答 年齢制限を守らないアプリ利用例も～に調査の監修者として講演とクロストーク者として出演
8. 円卓「スマートフォン」教育新聞1面	単独	2013年2月25日	教育新聞	スマートフォンの普及により子どもをめぐる環境が様変わりしたことについてコラムに執筆した。
9. 「好きな言葉」教育新聞1面	単独	2014年1月1日	教育新聞	「好きな言葉」について記載した
10. お酒軽くすすめないで！未成年者への害深刻	単独	2013年5月24日	東京新聞 暮らし10面	大人に反発しがちな多感な思春期の子ども達への関わりを解説した。
11. 円卓「ネット・スマホ雑感」教育新聞1面	単独	2013年9月30日	教育新聞	スマートフォンの普及により子どもをめぐる環境(家庭・教育現場)が様変わりしたことについてコラムに執筆した。

12. 子育て（日曜掲載） どうする？子どものおねしょ -ためる力 あせらんで-	単独	2014年9月28日	朝日新聞	おねしょが続くことによって起こる心の問題について執筆した。
13. くらしナビ子育て・親子 家族で協力 おねしょ卒業	単独	2014年10月13日	毎日新聞	子どものおねしょによって起こる心の問題、受診の大切さについて執筆した。
14. 『おねしょ』受診で治そう夜尿症、専門家が啓発運動	単独	2014年9月29日	東奥新聞	夜尿症によって起こる親子の悩みについて、正しい知識を持つ必要性を語った。
15. 子ども親も心理的負担 小児科などに相談を	単独	2014年9月30日	佐賀新聞	夜尿症によって起こる親子の悩み、学校生活で起こる問題、正しい知識を持つ必要性を語った。
16. 『夜尿症』早めの対処を 放置するとイジメの対象に	単独	2014年10月10日	夕刊フジ	夜尿症によって起こる親子の悩み、学校生活で起こる問題、子どもを見守る親の対処が大切であることを語った。
17. おねしょの悩みは深刻 専門家がアドバイス つらい記憶が残る前に受診を	単独	2014年9月22日	神奈川新聞	夜尿症によって起こる親子の悩み、学校生活で起こる問題、正しい知識を持つ必要性を語った。
18. すこやかゼミ おねしょの悩みは深刻 受診して早く治そう	単独	2014年9月22日	北國新聞	夜尿症によって起こる親子の悩み、正しい知識を持つ必要性を語った。
19. すこやかゼミ おねしょの悩みは深刻 受診して早く治そう	単独	2014年9月22日	富山新聞	夜尿症によって起こる親子の悩み、正しい知識を持つ必要性を語った。
20. おねしょの悩みは深刻 専門家が助言 受診して治療を	単独	2014年9月22日	福島民報	夜尿症によって起こる親子の悩み、正しい知識を持つ必要性を語った。
21. 夜尿症プレスセミナー～こころとからだの視点から おねしょ卒業プロジェクト	単独	2014年9月25日	教育医事新聞	夜尿症について、親と子の双方が抱える心理的ダメージや、学校生活に与える影響、医療機関に相談することの大切さについて助言した。
22. 夜尿症は治療で治る 通院での治療で自信回復 患者数は全国に約80万人	単独	2014年10月6日	教育新聞	夜尿症について、カウンセリングの立場から、親子の心の問題について発言した。
23. 円卓「希望についての雑感」教育新聞1面	単独	2015年6月25日	教育新聞	希望の大切さについての雑感をコラムに執筆した。

24. 子育ては自分育て一子育てに見る大人塾一第1回子どもに「クソババア！」と言われたら大成功	単独	2015年	日本行政書士会広報誌	3回シリーズの第1回として思春期の子どもに対する子育てのポイントについて述べた。
25. 子育ては自分育て一子育てに見る大人塾一第2回自立のための親離れ・子離れ	単独	2015年	日本行政書士会広報誌	3回シリーズの第2回として親離れ・子離れの時期の言葉かけや子育てのポイントについて述べた。
26. 子育ては自分育て一子育てに見る大人塾一第3回大切な人とよりよい関係を築くために	単独	2015年	日本行政書士会広報誌	3回シリーズの第3回として大人も子どももプラスの心理的交流をもらえないとマイナスな心理的交流を求めることについて解説した。
27. 学校図書館へ寄せる思い「熱い期待を語る」一癒やしの場に一	単独	2016年1月14日	教育新聞 第3414号	チームメンバーの一員として学校図書館と司書に望むことについて述べた。総合5面
28. 医療ルネッサンス-夜尿症第4回 悩む親子の心をサポート	単独	2016年3月8日	読売新聞	夜尿症の親子の心理的ストレスと対処法について述べた。くらし16面
29. 【特集】「クソババア」に万歳！ 反抗期の暴言は成長の証し	単独	2016年2月1日	共同通信	【特集】「クソババア」に万歳！反抗期の暴言は成長の証し <a href="http://www.47news.jp/47topics/addon/2016/02/273165.html">http://www.47news.jp/47topics/addon/2016/02/273165.html</a>
30. スマホに依存しすぎていませんか？ 昼夜逆転で睡眠障害も親子間のルール作り予防に効果	単独	2016年8月20日	日本経済新聞	「NIKKEIプラス1」 学校生活の質を著しく低下させるスマホ依存について「睡眠&生活チェックシート」を紹介しながら危険性や対応について述べた。
31. 思春期の「うるせえ」を翻訳機にかけてみると？	単独	2018年6月8日	日経DUAL	思春期の子どもに起こる変化や問題点、家庭での課題について述べた。 <a href="http://oced101-v.nikkeibp.co.jp/atcl/column/17/101900012/060600031/index.html">http://oced101-v.nikkeibp.co.jp/atcl/column/17/101900012/060600031/index.html</a>
32. 親の過剰な期待 子に取り返しつかない弊害もたらず	連名	2019年4月15日	日経DUAL	教育虐待のもたらす弊害について述べた。 <a href="https://dual.nikkei.co.jp/atcl/column/17/041100186/041100001/">https://dual.nikkei.co.jp/atcl/column/17/041100186/041100001/</a> (古荘純一・武田信子・田村節子)
33. 「教育熱心」と「教育虐待」線引きはどこ？	連名	2019年4月16日	日経DUAL	「教育虐待」と「教育熱心」の線引き、家庭で特に気をつけておくべきこと、教育虐待をしてしまう人の心理、教育虐待が起きやすい社会的背景等について述べた。(古荘純一・田村節子・武田信子) <a href="https://dual.nikkei.co.jp/atcl/column/17/041100186/041400002/">https://dual.nikkei.co.jp/atcl/column/17/041100186/041400002/</a>
34. 子の幸せ見極め教育虐待を防ぐ NGワード&考え方	連名	2019年4月19日	日経DUAL	教育虐待を未然に防ぐ考え方について述べた。 <a href="https://dual.nikkei.co.jp/atcl/column/17/041100186/041500003/">https://dual.nikkei.co.jp/atcl/column/17/041100186/041500003/</a> (武田信子・田村節子)



(メディア出演)	出演	2009年9月	NHK教育テレビ	NHK教育テレビ「となりの子育て-どう向き合う！反抗期」に出演・放映（翌週再放送） 司会（藤井隆・高野），ゲスト（原日出子）
1. NHK教育テレビ 「となりの子育て」	出演	2009年9月	NHK教育テレビ	NHK教育テレビ「となりの子育て-どう向き合う！反抗期」に出演・放映 再放送
2. NHK教育テレビ 「となりの子育て」 再放送	出演	2009年11月	NHK教育テレビ	NHK教育テレビ「となりの子育て-どう向き合う！反抗期」視聴者希望によるアンコール放送
3. NHK教育テレビ 「となりの子育て」 アンコール放送	出演	2010年1月	NHK総合テレビ	NHK総合テレビ「とくせんETV」に上記テレビ番組が選出され放映
4. NHK総合テレビ 「とくせんETV」	出演	2010年5月	NHK教育テレビ	NHK教育テレビ「となりの子育て-こどもの家の顔・外の顔」に出演・放映 会（藤井隆・高野），ゲスト（たむらけんじ）
5. NHK教育テレビ 「となりの子育て」	出演	2010年5月	NHK教育テレビ	NHK教育テレビ「となりの子育て-こどもの家の顔・外の顔」再放送
6. NHK教育テレビ 「となりの子育て」	出演	2010年9月	NHK教育テレビ	NHK教育テレビ「となりの子育て-こどもの家の顔・外の顔」視聴者希望によるアンコール放送
7. NHK教育テレビ 「となりの子育て」	出演	2010年11月	NHK教育テレビ	NHK教育テレビ「となりの子育て-どうしてわが子をかわいがれないの」に出演・放映 会（藤井隆・高野），ゲスト（高見恭子）
8. NHK教育テレビ 「となりの子育て」	講師	2010年 11月	NHK教育テレビイベント	NHK教育テレビ関連イベント「となりの子育てしゃべって納得in岡山」に講師として出演
9. NHK教育テレビ 「となりの子育て」関連イベント	講師	2010年 12月	NHK教育テレビイベント	NHK教育テレビ関連イベント「となりの子育てしゃべって納得in奈良」に講師として出演
10. NHK教育テレビ 「となりの子育て」関連イベント	講師	2011年2月	NHK教育テレビイベント	NHK教育テレビ関連イベント「となりの子育てしゃべって納得in山形」に講師として出演
11. NHK教育テレビ 「となりの子育て」関連イベント	講師	2011年3月	NHK教育テレビイベント	NHK教育テレビ関連イベント「となりの子育てしゃべって納得in岐阜」に講師として出演
12. NHK教育テレビ 「となりの子育て」関連イベント	出演	2012年4月18日	フジテレビ	「危ない！親子関係」をテーマにしたバラエティ番組の中で、「学校心理専門家」と出演。「思春期では、子どもに『くそばばあ』と言われたら大成功』との発言が、Twitterのホットワードで15位となる。
13. フジテレビ 「ホンマでっかTV！ -危ない！親子関係-」	出演	2012年10月31日	フジテレビ	フジテレビ「ホンマでっか！？TV—最新教育事情—」に「学校心理評論家」として出演
14. フジテレビ「ホンマでっか！？TV—最新教育事情—」				

15. デジタルアーツ株式会社 (子ども向け携帯フィルタリング会社) 記者発表会 「スマホアプリ利用とネット上のコミュニケーション実態調査発表会」 調査の監修者として講演とクロストークに出演	出演	2012年12月10日	デジタルアーツ株式会社	デジタルアーツ株式会社 (子ども向け携帯フィルタリング会社) 記者発表会 「スマホアプリ利用とネット上のコミュニケーション実態調査発表会」 ～ 小中高生の2人に1人はネット上に友人がおり、女子高生の半数以上がネット上で知り合った人と直接会ってみたいと回答 年齢制限を守らないアプリ利用例も～に調査の監修者として講演とクロストークに出演 ネット記事がヤフー、日本経済新聞等に掲載
16. Rの法則「SNSに気をつけろ」	ビデオ出演	2013年3月5日	NHK教育テレビ	「SNSに気をつけろ」にて、高校生がSNSに陥りやすい心理についてチェックリストを用いて解説した。
17. フジテレビ「ホンマでっか!?TV—最新教育事情—」	出演	2013年3月6日	フジテレビ	フジテレビ「ホンマでっか!?TV—最新教育事情—」に「学校心理評論家」として出演
18. 日本テレビ「得する人損する人」	出演	2014年1月16日?	日本テレビ	日本テレビ「得する人損する人」の最新ニュースのコーナーにて教育評論家として出演
19. フジテレビ「ホンマでっか!?TV—最新教育事情—」	出演	2014年1月29日	フジテレビ	フジテレビ「ホンマでっか!?TV—最新教育事情—」に「学校心理評論家」として出演
20. フジテレビ「ホンマでっか!?TV—最新教育事情—」	出演	2014年5月7日	フジテレビ	フジテレビ「ホンマでっか!?TV—最新教育事情—」に「学校心理評論家」として出演
21. プレスセミナー おねしょ卒業!プロジェクト「夜尿症プレスセミナー～こことからの視点から」	登壇	2014年8月26日	おねしょ卒業!プロジェクト	吉田茂医師の夜尿症治療についての解説後、こどものいじめや親子関係のあつれきにもつながる“夜尿症”について、カウンセラーの立場から解説した。 (プレス向け講演)
22. WEB講演 夜尿症Web講演会 知っておきたい夜尿症診療のポイント～おねしょの心理的影響	出演	2015年7月	協和発酵キリン株式会社、フェリング・ファーマ株式会社	池田裕一医師の夜尿症治療についての解説後、夜尿症の心理的影響についてweb講演を行った。 (医師向け講演)
23. フジテレビ「ホンマでっか!?TV 人生相談」	出演	2016年6月	フジテレビ	フジテレビ「ホンマでっか!?TV—人生相談—」に「学校心理評論家」として出演
24. NHK総合テレビ 週間ニュース深読み 「子どもをどう守る? 危ないスマホ”自画撮り”」	出演	2017年2月25日	NHK総合テレビ	スマホを自画撮りする子どもの心理について生放送出演し解説した。
25. NHK教育テレビ #ジューダイ『生放送でお悩み相談「不満? 感謝? これだけは親に言いたい!」』	コメント出演	2018年1月25日	NHK教育テレビ	親への不満に対する子ども達の声にコメント出演をした。

#### 4. 科研費等の外部資金獲得状況

##### 科学研究費

(研究代表者として取得)

- (1) 田村節子 基盤研究 (C) (一般) (平成24年度～平成26年度)  
子ども参加型援助チームモデルの開発—発達障害のある子どもの援助に焦点をあてて—
- (2) 田村節子 基盤研究 (C) (一般) (平成29年度～平成31年度)  
教育・医療・家庭の連携モデルによる「発達障害や夜尿の子どものQOL向上」の試み

(研究分担者として)

- (1) 研究代表 家近早苗 基盤研究 (C) (一般) (平成23年度～平成25年度)  
「ほんものチーム」と「にせチーム」を分ける要因—発達障害への援助に向けて—
- (2) 研究代表 石隈利紀 基盤研究 (C) (一般) (平成24年度～平成26年度)  
危機における子どもや教師の被援助志向性やチーム援助がレジリエンスに与える影響
- (3) 研究代表 石隈利紀 基盤研究 (C) (一般) (平成29年度～平成31年度)  
「チーム学校」の促進要因・阻害要因に関する日米比較研究—教育相談の視点から—

以 上